中期目標の達成状況に関する評価結果

（中期目標期間終了時評価）

東北大学

令和５年３月

大学改革支援・学位授与機構

目　　次

法人の特徴・・ 1

（法人の達成状況報告書から転載）

評価結果

≪概要≫・・ 5

≪本文≫・・ 6

≪判定結果一覧表≫・・ 32

－≪本文≫における特記事項の冒頭「○」「●」について－

○：第３期中期目標期間４年目終了時評価において抽出されている特記事項※

●：第３期中期目標期間終了時評価において、４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化として、追加で抽出されている特記事項

※　新型コロナウイルス感染症下における対応については、４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化の有無にかかわらず、令和２、３年度における取組や実績等を更新している。

法人の特徴

大学の基本的な目標（中期目標前文）

東北大学は、開学以来の「研究第一主義」の伝統、「門戸開放」の理念及び「実学尊重」の精神を基に、数々の教育研究の成果を挙げてきた実績を踏まえ、これらの伝統、理念等を積極的に踏襲し、東北大学の強み・特色を発展させ、独創的な研究を基盤として、「人が集い、学び、創造する、世界に開かれた知の共同体」として進化することを目指す。すなわち、第３期中期目標期間においては、高等教育を推進する総合大学（指定国立大学法人）として、以下の目標を高い次元で実現し、もって国際的な頭脳循環の拠点として世界に飛躍するとともに、東日本大震災の被災地の中心に所在する総合大学として、社会の復興・新生を先導する役割を担う。

１　教育目標・教育理念 ―「指導的人材の養成」
・学部教育では、豊かな教養と人間性を持ち、人間・社会や自然の事象に対して「科学する心」を持って知的探究を行うような行動力のある人材及びグローバルな視野に立ち多様な分野で専門性を発揮して指導的・中核的役割を果たす人材を養成する。
・大学院教育では、世界水準の研究を理解し、これに創造的知見を加えて新たな展開を遂行できる創造力豊かな研究者及び高度な専門的知識を持つ高度専門職業人を養成する。

２ 使命 ―「研究中心大学」
・東北大学の伝統である「研究第一主義」に基づき、真理の探究等を目指す基礎科学を推進するとともに、研究中心大学として人類と社会の発展に貢献するため、研究科と研究所等が一体となって、人間・社会・自然に関する広範な分野の研究を行う。それとともに、「実学尊重」の精神を活かした新たな知識・技術・価値の創造に努め、常に世界最高水準の研究成果を創出し、広く国内外に発信する。
・知の創造・継承及び普及の拠点として、人間への深い理解と社会への広い視野・倫理観を持ち、高度な専門性を兼ね備えた行動力ある指導的人材を養成する。

３ 基本方針 ―「世界と地域に開かれた世界リーディング・ユニバーシティ」
・人類社会の様々な課題に挑戦し、人類社会の発展に貢献する「世界リーディング・ユニバーシティ」（世界三十傑大学）であることを目指す。
・世界と地域に開かれた大学として、自由と人権を尊重し、社会と文化の繁栄に貢献するため、「門戸開放」の理念に基づいて、国内外から、国籍、人種、性別、宗教等を問わず、豊かな資質を持つ学生と教育研究上の優れた能力や実績を持つ教員を迎え入れる。それとともに、産業界はもとより、広く社会と地域との連携研究、研究成果の社会への還元や有益な提言等の社会貢献を積極的に行う。
・市民の知的関心を受け止め、支え、育んでいける教育研究活動を積極的に推進するとともに、市民が学術文化に触れつつ憩える環境に配慮したキャンパス創りを行う。

東北大学の構成員一人ひとりの能力を存分に発揮できる環境を整え、多彩な「個」の力を結集することによって、第３期中期目標期間における目標を達成していく。

１．東北大学の歴史

東北大学は、1907 年（明治 40 年）、東京帝国大学、京都帝国大学に続く３番目の帝国大学として創立された。設立当初から、高等専門学校、高等師範学校の卒業生にも門戸を開き、さらに 1913 年（大正２年）には日本の国立大学として初めて３名の女子の入学を許可し、「門戸開放」が東北大学の不動の理念であることを示した。

東北帝国大学は、創立に当たって若き俊秀が教授として集まったこともあり、研究者が独創的な研究成果を次々と生み出しながら、それを学生に対する教育にも生かすという「研究第一主義」の精神が確立された。さらに、戦前からいち早く大学発のベンチャー企業を設立して地域産業の育成を図るなど、世界最先端の研究成果を社会や人々の日常生活に役立てる「実学尊重」の伝統も育んできた。

２．東北大学の現在

東北大学は、10 学部、15 大学院研究科等、2012 年度に設置した災害科学国際研究所を含む６附置研究所に加え、多数の教育・研究に関わる機構・センター等を擁する総合大学として、基本的な目標として掲げる「指導的人材の養成」という教育目標・教育理念の下で、「研究中心大学」としての使命をもって、基本方針である「世界と地域に開かれた世界リーディング・ユニバーシティ」を目指して着実に歩を進め、人類社会の持続的発展に貢献してきた。

平成 29 年６月には、文部科学大臣から名実ともに日本を代表する大学として、世界の有力大学と伍していくことを使命とする「指定国立大学法人」の最初の３校に指定された。

平成 30 年 11 月には、社会・経済・科学技術が地球規模で連動する世界の将来像を見据え、他大学にはない東北大学独自の強みと可能性を見極めたうえで、2030 年に向けたあるべき姿・ありたい姿（ビジョン）と、その実現を目指した方針（重点戦略）、さらに具体的なアクション（主要施策）等を示した「東北大学ビジョン 2030」を策定・公表した。

さらに、令和元年度末に発生した世界規模の新型コロナウイルス感染症という危機において、それを克服し、ニューノーマル時代を見据えた新たな社会構築への貢献と新常態のもとでの社会変革を先導すべく、「東北大学ビジョン 2030」の更新を行い、教育、研究、社会との共創、さらには業務全般のオンライン化を強力に推進する「東北大学コネクテッドユニバーシティ戦略」を策定し、ポストコロナ時代を見据えた大学改革にスピード感をもって対応している。

このような状況の中、東北大学は社会からの負託に応え、大学の本分である教育研究活動をより高い次元で遂行するとともに、それを支える大学の経営運営も従来の発想から脱して能動的に改革をしていくため、以下の取組に格段の努力を傾注している。特に、未来を牽引する学生や若手研究者への責務を果たすための機能強化推進事業については、総長のリーダーシップにより継続的かつ重点的な支援を行っている。

[個性の伸長に向けた取組（★）]

○学生への経済的支援制度の拡充と学生寄宿舎の整備・充実

本学の個性を伸長させる取組として、学生への経済的支援を強化するため、本学独自の奨学金制度等を拡充するとともに、日本人学生と外国人留学生の国際混住型学生寄宿舎であるユニバーシティ・ハウスを活用した国際共修に繋がるキャンパス環境の整備・拡充を進めた。（関連する中期計画 1-3-1-1）

○説明会・オープンキャンパスの開催等による学生募集力の向上

本学の個性を伸長させる取組として、外国人留学生を含む本学進学への募集活動を強化するため、説明会・オープンキャンパス等を開催するとともに、海外拠点を利活用したリクルート活動等を展開した。（関連する中期計画 1-4-1-1）

○世界トップレベル研究の推進

本学の個性を伸長させる取組として、世界をリードする研究を重点的に推進し、Top10%論文数の着実な増加と世界 50 位以内に入る研究領域の拡大を図った。（関連する中期計画 2-1-1-2）

○イノベーション創出を実践する研究の推進

本学の個性を伸長させる取組として、世界最高水準の独創的着想に基づく研究を推進するため、民間企業等との共同研究数や共同研究講座・共同研究部門の設置数を着実に増加させるとともに、イノベーション創出プログラム(COI STREAM)等に代表される大型産学連携研究の拡充を図った。（関連する中期計画 2-1-2-2）

○トランスレーショナルリサーチ(基礎から臨床への橋渡し研究)の促進

本学の個性を伸長させる取組として、生命科学・医工学分野の基礎研究成果の実用化を促進するため、全学の研究シーズ登録数を着実に増加させるとともに、大学発の革新的な医薬品及び医療機器の開発シーズの実用化を進展させた。（関連する中期計画2-1-2-3）

○外国人留学生の戦略的受入れと就学環境の整備

本学の個性を伸長させる取組として、外国人留学生を 3,000 人に拡大するため、留学生受入れ戦略としての教育プログラムの充実、留学生の支援措置の拡充など、就学環境のさらなる整備を進めた。（関連する中期計画 5-1-2-1）

○本学学生の海外留学と国際体験の促進

本学の個性を伸長させる取組として、単位取得を伴う海外留学体験学生を年間 1,000 人に拡大するため、入学前海外研修プログラム等を実施するとともに、海外留学・海外インターンシップの促進体制を整備した。（関連する中期計画 5-1-2-2）

○外国人教員等の増員

本学の個性を伸長させる取組として、外国人教員等を 1,000 人以上に拡大するため、柔軟な人事・給与システムの運用等を整備し、外国人教員等の組織的・戦略的雇用を促進した。（関連する中期計画 5-1-3-3）

［戦略性が高く意欲的な目標・計画（◆）］

ユニット：世界を牽引する博士人材養成、最先端の国際共同研究推進及び戦略的研究拠点形成の加速

本学の研究力の強み・弱みの客観的な分析に基づき、海外の有力大学との協働により「国際共同大学院プログラム」を設置し、グローバルな視野を持った世界を牽引する高度な博士人材の養成、世界トップを目指すあるいは社会的使命として世界に先駆けて創成すべき分野の世界的研究拠点の形成、世界最高水準の外国人研究者を招へいする「知のフォーラム」事業の推進等により最先端の国際共同研究を推進する。加えて、研究組織をミッション別に三階層化した基盤体制（研究イノベーションシステム）を構築して戦略的な研究拠点形成を加速する。

○世界を牽引する高度な人材の養成（関連する中期計画 1-1-2-6）

○国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進（関連する中期計画 2-1-1-3）

○世界最高水準の最先端研究機構群の設置（関連する中期計画 2-2-2-1）

ユニット：アドミッションポリシーに適合する入学者選抜方法の改善

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・総合的に評価する入学者選抜が可能となるように、AO 入試の定員拡大と国際通用性のある多様な入試方法の積極的導入により、本学のアドミッションポリシーに適合する優秀な学生を国内外から確保する。

○アドミッションポリシーに適合する入学者選抜方法の改善（関連する中期計画 1-4-1-2）

ユニット：イノベーションを先導する世界的産学連携研究開発拠点の構築

立地条件に恵まれた青葉山新キャンパスの環境を活用した国立大学最大の産学共創スクエアを構築して、産学官の知・技術・人材が交差・循環する価値創造の場を拡大する。

○世界標準の産学連携マネジメントの推進（関連する中期計画 3-1-1-1）

ユニット：社会の復興・新生を先導

東日本大震災の被災地の中心に所在する総合大学として、地域の課題を踏まえ、地域の特色や資源を活用した被災からの復興・新生に寄与する活動を継続して実施するとともに、東日本大震災で得られた教訓・知見を世界に発信・共有し、災害統計データの集積・提供など科学的知見に基づいた国際貢献活動を展開する。

○科学的知見に基づく国際貢献活動（関連する中期計画 4-1-2-1）

評価結果

≪概要≫

第３期中期目標期間の教育研究の状況について、法人の特徴等を踏まえ評価を行った結果、東北大学の中期目標（大項目、中項目及び小項目）の達成状況の概要は、以下のとおりである。

＜判定結果の概要＞

中期目標（大項目） / 中期目標（中項目）	判定	中期目標（小項目）判定の分布				
		【５】特筆すべき実績を上げている	【４】優れた実績を上げている	【３】達成している	【２】十分に達成しているとはいえない	【１】達成していない
Ⅰ 教育に関する目標	【４】上回る成果が得られている					
１ 教育内容及び教育の成果等に関する目標	【４】上回る成果が得られている		2			
２ 教育の実施体制等に関する目標	【４】上回る成果が得られている		1			
３ 学生への支援に関する目標	【３】達成している			1		
４ 入学者選抜に関する目標	【４】上回る成果が得られている		1			
Ⅱ 研究に関する目標	【５】顕著な成果が得られている					
１ 研究水準及び研究の成果等に関する目標	【４】上回る成果が得られている	1	1	1		
２ 研究実施体制等に関する目標	【４】上回る成果が得られている		1	1		
Ⅲ 社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標	【４】上回る成果が得られている					
	なし		2			
Ⅳ 災害からの復興・新生に関する目標	【５】顕著な成果が得られている					
	なし	2				
Ⅴ その他の目標	【４】上回る成果が得られている					
１ グローバル化に関する目標	【４】上回る成果が得られている	1	1	1		

※ 大項目「Ⅰ 教育に関する目標」及び「Ⅱ 研究に関する目標」においては、４年目終了時に実施した学部・研究科等の現況分析結果による加算・減算を反映している。

≪本文≫

Ⅰ　教育に関する目標（大項目１）

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「教育に関する目標」に係る中期目標（中項目）４項目のうち、３項目が「中期目標を上回る成果が得られている」、１項目が「中期目標を達成している」であり、これらの結果に学部・研究科等の現況分析結果（教育）を加算・減算して総合的に判断した。

２．中期目標の達成状況

（１）教育内容及び教育の成果等に関する目標（中項目 1-1）

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「教育内容及び教育の成果等に関する目標」に係る中期目標（小項目）２項目のうち、２項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」であり、これらを総合的に判断した。

<table>
<tr><th>小項目 1-1-1</th><th colspan="2">判定</th><th>判断理由</th></tr>
<tr><td rowspan="3">現代社会の課題に挑戦するグローバルリーダー育成の基盤となる学士課程から大学院課程に至る高度教養教育を確立・展開する。</td><td>【４】</td><td>中期目標を達成し、優れた実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「ICT の活用による学習方法の提供」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　ICT の活用による学習方法の提供
情報通信技術(ICT)を活用した学習方法の提供や授業収録配信システムの運用方針の制定により、全学教育において ICT を利用する授業が平成 27 年度の 1,590 授業中 222 授業</td></tr>
</table>

	の 14.0%から令和元年度の 2,354 授業中 1,515 授業の 64.4%に増加している。令和２年度第１学期においては新型コロナウイルス感染拡大防止への対応として 100%の授業がオンラインで実施されており、ICT 活用が一気に加速し、目標とする ICT 利用率の 80%は令和２年度で達成見込みとなっている。（中期計画 1-1-1-1） （特色ある点） ○　学生相互による学習支援 学部３年次以上の学生が学部１・２年次生（全学教育段階）の学びを支援する「SLA（エスエルエー）」制度において、ライティング支援の利用者数は「個別対応型」が平成 27 年度の延べ人数 75 名から令和元年度 224 名と 2.99 倍、「企画発信型」が平成 27 年度 17 名から令和元年度 216 名の 12.7 倍に増加している。（中期計画 1-1-1-1） ○　現代社会に必要なリテラシー教育の推進 現代社会に必要なリテラシーの修得に取り組む「挑創カレッジ」として①グローバルマインドセット（グローバルリーダー育成プログラム：TGL）、②AI・データスキル（コンピュテーショナル・データサイエンス・プログラム：CDS）、③アントレプレナーシップ（企業家リーダー育成プログラム：TEL）を令和元年度に創設するとともに、「データ駆動科学・AI 教育研究センター」と連携して学部・大学院を通じた「AI・データ科学教育」（文系・理系を問わず全学教育の受講者全員を対象とした「AI&Data for All」等）の教育体制を構築している。（中期計画 1-1-1-1） ○　アクティブ・ラーニングの推進 学部初年次に開講されているアクティブ・ラーニングによる授業科目「展開ゼミ」は、平成 27 年度は 46 クラスの開講であったが、その後令和元年度まで増加を続け、平成 30 年度には目標としていた 90 クラスを超える 101 クラス（対平成 27 年度比 220%）の開講となり、令和元年度の開講クラス数は 108 クラス（対平成 27 年度比 235%）となっている。（中期計画 1-1-1-1）

<table>
<tr><th>小項目 1-1-2</th><th colspan="2">判定</th><th>判断理由</th></tr>
<tr><td rowspan="3">高度な専門性と分野を超えた鳥瞰力を持って新しい価値を創出できる指導的人材を育成するため、高度教養教育との密接な連携及び海外大学との共同教育の下で、学部専門教育・大学院教育を推進する。</td><td>【４】</td><td>中期目標を達成し、優れた実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「リーディングプログラム及び卓越大学院プログラムの開設」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　リーディングプログラム及び卓越大学院プログラムの開設
リーディングプログラムには２つのプログラムが採択されており、文部科学省の支援終了後も継続的に実施されている。平成 27 年度から開始したリーディングプログラムの修了者数は令和元年度で 99 名に達している。また、文部科学省の「卓越大学院プログラム」として、これまで全国最多となる３件の産学共創のプログラムが採択されている。令和２年度には、３プログラム合同で「ニューノーマルを創る～コロナ新時代を拓く東北大学卓越大学院セミナーシリーズ～」を開催している。（中期計画 1-1-2-2）
（特色ある点）
○　国際共同大学院プログラムの拡充
東北大学学位プログラム推進機構による国際共同大学院プログラムにおけるプログラム数は、平成 27 年度の１プログラムから令和元年度には９プログラムに増加し、設置計画プログラムの目標数を開設から５年目で達成している。（中期計画 1-1-2-2）
○　国際通用性を見据えた学位の質保証
平成 28 年度より、国際通用性を見据えた学位を保証するため、東北大学学位プログラム推進機構の各部門では、各部門の学位審査委員会の下に、外部委員や海外教員を含む複数名の審査員による QE(Qualifying　Examination)及びプログ</td></tr>
</table>

	ラム学位審査を行い、令和元年度までに 120 名のプログラム修了生（博士学位授与者）を輩出している。（中期計画 1-1-2-4） ○　学位プログラム推進機構の設置 平成 27 年度に学際的な教育プログラムや横断的な学位プログラムを束ねる組織として東北大学学位プログラム推進機構を設置し、先進的な大学院教育プログラムを全学展開している。平成 27 年度の４つのプログラムから令和元年度には 14 のプログラムに増加している。（中期計画 1-1-2-6）

（２）教育の実施体制等に関する目標（中項目 1-2）

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「教育の実施体制等に関する目標」に係る中期目標（小項目）が１項目であり、当該小項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」であることから、これらを総合的に判断した。

小項目 1-2-1	判定		判断理由
教育の大学 IR(Institutional Research)機能を活用した全学的教学マネジメントの下で、教養教育・学部専門教育・大学院教育の実施体制等を整備・充実するとともに、国際通用性の高い教育システムの開発を行い、教育の質を向上させる。	【４】	中期目標を達成し、優れた実績を上げている	・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。 ・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「教員の年齢構成の適正化に向けた取組」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。
	≪特記事項≫		
	（優れた点） ○　教員の年齢構成の適正化に向けた取組 適正な年齢構成を実現するため、若手教員と女性教員比率の向上を目指した結果、令和元年度の若手教員比率は 22.7%となっている。高等研究機構に 200 名規模の若手教員ポストを確保している。また、女性教員比率を向上させるため、平成 29 年度から女性教員採用促進事業を開始し、女性教員比率は、平成 27 年度の 13.1% から令和元年度には		

	16.0%になっている。(中期計画 1-2-1-2) （特色ある点） ○　教員の専門教育指導力の育成 教員の専門教育指導力を育成するプログラムの新規開発・提供として、STEM 分野における教育力向上のためのプログラムを開発し、平成 28 年度から令和元年度までに８回のセミナー・ワークショップを実施している。特に、平成 30 年度には、ノーベル物理学賞受賞者を含む専門家を招いての国際シンポジウム等を実施し、学問分野固有の専門性の習得に向けた教育研究である DBER（Discipline-Based Education Research）の大学教育への導入・普及に向けての役割を果たしている。(中期計画 1-2-1-5) ○　外国人教員の増員 外国人教員等の雇用促進を図るため、「外国人教員雇用促進経費」、「クロスアポイントメント活用促進支援制度」及び「若手女性・若手外国人特別教員制度」等の取組を新たに導入し、推進している。その結果、外国人教員等数は平成 27 年度の 888 名から令和元年度には 1,034 名（16.4%増員）に増加している。(中期計画 1-2-1-2) ○　新型コロナウイルス感染症下の教育 新型コロナウイルス感染症の影響による国際的な学生交流事業の停滞、海外留学の停止と留学生の減少による国際活動の鈍化、アクティブ・ラーニングを取り入れた国際共修・体験型授業の非アクティブ化など、コロナ禍で浮き彫りになった課題に挑戦し、ニューノーマル時代におけるグローバル人材を目指す学生への学習・生活を支援するため、令和２年４月より４つのユニットから構成される新たな国際教育支援プロジェクト「Be Global」を展開している。(中期計画 1-2-1-3)

（３）学生への支援に関する目標（中項目 1-3）

【評価結果】中期目標を達成している

（判断理由）「学生への支援に関する目標」に係る中期目標（小項目）が１項目であり、当該小項目が「中期目標を達成している」であることから、これらを総合的に判断した。

小項目 1-3-1	判定		判断理由
国際混住型学生寄宿舎の整備・拡充をはじめとする経済的支援、生活支援、キャリア支援及び課外活動支援を柱とした障害者を含む学生への支援機能を強化する。	【３】	中期目標を達成している	・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
≪特記事項≫			
（優れた点） ●　博士学生・博士研究員（ポスドク）のキャリア支援 博士学生・博士研究員（ポスドク）のキャリア支援を推進する組織として、令和３年度に大学院改革推進センター博士人材育成ユニットを設置している。博士学生（支援対象者）の就職率は第２期末の平成 27 年度 82.4%と比べ第３期中は概ね 90%前後と高い就職率を維持するとともに、令和３年度は過去最高の 95.7%となっている。（中期計画 1-3-1-3） （特色ある点） ○　独自財源による経済支援 令和元年度は、大学院学生に対して東北大学独自の財源で、学位プログラム及び「グローバル萩博士学生奨学金」に年間約７億 5,000 万円の支援を行っている。特に博士課程後期学生において、生活費相当（月額 15 万円：年額 180 万円）以上の経済支援を受けている学生は、社会人及び休学者を除き、平成 30 年度には全体の３割を超えており、政府が第５期科学技術基本計画において掲げる目標である２割を上回っている。（中期計画 1-3-1-1） ●　東北大学緊急学生支援パッケージによる迅速な支援 新型コロナウイルス感染症の拡大を踏まえ、令和２年４月、全国立大学に先駆けて多様な支援をパッケージ化して多面的にサポートする「東北大学緊急学生支援パッケージ」を決定し、実行している。パッケージの一つとして、在学生による新入生等を支援する学生ピアサポーター制度（２億円規		

	模）を創設し、令和３年度には支援対象を拡大し、支援のさらなる充実を図っている。本制度に係る令和２年度及び令和３年度の支援実績は、支援対象学生の 99%と支援対象のほぼ全ての学生が本制度を活用している。なお、高校の進路指導教諭による「コロナ対応が上手だったと思われる大学」ランキング（大学通信）において、国立大学第１位を獲得している。（中期計画 1-3-1-2）

（４）入学者選抜に関する目標（中項目 1-4）

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「入学者選抜に関する目標」に係る中期目標（小項目）が１項目であり、当該小項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」であることから、これらを総合的に判断した。

小項目 1-4-1	判定		判断理由
アドミッションポリシーに適合する、優秀で意欲的な学生が国内外から受験する入試戦略を展開し、より多面的・総合的な選抜を実施する。	【４】	中期目標を達成し、優れた実績を上げている	・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。 ・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「大規模なオープンキャンパスの開催」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。
	≪特記事項≫		
	（優れた点） ○　大規模なオープンキャンパスの開催 令和元年度のオープンキャンパス参加者数は６万 8,403 名であり、平成 27 年度の６万 411 名から約 13%増加し、株式会社朝日新聞出版の『大学ランキング 2021』（平成 30 年度のデータ６万 8,228 名での集計）において、全国１位の規模となっている。全ての入学者のうち、５割以上が東北大学のオープンキャンパスに参加経験があり、そのうちの８割強が、「進路決定の決め手となった」等と答えており、オープンキャンパスが多くの志願者獲得に貢献している。また、		

	『大学ランキング 2021』において、高校からの評価（全国）ランキングは「総合評価」１位、「進学先で生徒が伸びた」１位、「情報開示に熱心」で１位という評価を得ている。（中期計画 1-4-1-1） （特色ある点） ○　英語ウェブページによる発信力の強化 東北大学英語版ウェブサイトや東北大学グローバルラーニングセンターウェブサイトでは、海外から出願する学生向けの入試や交換留学プログラムの情報提供、キャンパスや学生生活、研究内容を紹介するプロモーションビデオを公開しており、令和元年度のグローバルラーニングセンターのウェブサイト閲覧数は平成 27 年度（９万 6,896 回）と比較して 2.5 倍以上（25 万 157 回）となっている。（中期計画 1-4-1-1） ○　スチューデントアンバサダー制度の導入 理学部、工学部及び農学部で実施する国際学士コースでは、平成 30 年度より国際学士コース在学生を広報スタッフとして活用する「スチューデントアンバサダー」制度を導入しており、平成 29 年度に訪問した国・地域はそれぞれ、９か国・30 地域であったが、平成 30 年度は 11 か国・36 地域へと増加している。その結果、国際学士コース出願者数は令和元年度（177 名）は６年前（平成 25 年度：55 名）と比較して３倍以上となっている。（中期計画 1-4-1-1） ○　海外現地入試の実施 国際学士コース入試（理学部、工学部及び農学部の３コース）は、出願から入学試験まで志願者が日本に渡日せずに完結するよう、オンライン出願及び教職員が直接現地に赴き筆記試験や面接を行う現地入試を継続的に実施しており、令和元年度入学試験は、12 か国・地域、18 会場において現地入試を実施している。その結果、令和元年度の国際学士コース出願者数は平成 27 年度（96 名）と比較して、1.8 倍以上（177 名）となっている。（中期計画 1-4-1-2）

Ⅱ　研究に関する目標（大項目２）

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標を上回る顕著な成果が得られている

（判断理由）「研究に関する目標」に係る中期目標（中項目）２項目のうち、２項目が「中期目標を上回る成果が得られている」であり、これらの結果に学部・研究科等の現況分析結果（研究）を加算・減算して総合的に判断した。

２．中期目標の達成状況

（１）研究水準及び研究の成果等に関する目標（中項目 2-1）

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「研究水準及び研究の成果等に関する目標」に係る中期目標（小項目）３項目のうち、１項目が「中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている」、１項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」、１項目が「中期目標を達成している」であり、これらを総合的に判断した。

<table>
<tr><th>小項目 2-1-1</th><th colspan="2">判定</th><th>判断理由</th></tr>
<tr><td rowspan="3">長期的視野に立つ基盤研究及び世界を牽引する最高水準の研究を推進する。</td><td>【５】</td><td>中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「被引用度の高い論文成果等の発信」、「戦略的国際共同研究ファンドの設立 」が優れた点として認められるなど「特筆すべき実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　科研費採択増に向けた取組
科学研究費助成事業の採択に向けた全学的な取組により、対平成 27 年度比にして基盤研究 S で 1.5 倍超の増加、基盤研究 B ならびに C で 10%（年平均 40 課題と 70 課題）増加</td></tr>
</table>

	し、大型研究種目ならびに主に若手研究者が提案する種目で増加している。全採択件数（新規課題＋継続課題）は全国４位で、また、理工系・医歯薬系の 33 細目に加えて、人文社会系の３細目で採択件数（過去５年の新規採択累計数。平成 28 年度の調査結果）が全国第１位となっている。（中期計画 2-1-1-1） ● 被引用度の高い論文成果等の発信 ４年目終了時に、世界トップレベルの研究拠点を目指す高等研究機構の４領域①材料科学、②スピントロニクス、③未来型医療、④災害科学においては、それぞれの拠点で令和 12 年度までに Top１％及び Top10％論文の成果発表の目標達成に向けて、成果が上がっている。全総文献発表数は、対平成 27 年度比において、第３期中期目標期間の４年間平均で８％（約 350 報）増えるとともに、被引用度の高い Top10％論文は、対平成 27 年度比(726 報)で、20％以上増加させることを目指し、平成 28 年度から平成 30 年度の平均(885.3 報)で、既に 21.9％増となっている。 さらに、中期目標期間終了時においては、Top10%論文数を対平成 27 年度比（726 報）で 20%以上増加させることを目指して、令和３年度は 1,029 報（平成 27 年度比 41.7%増）と目標を大幅に上回って達成するなど、顕著な向上が見られる。中でも、災害感染症における COVID-19 関連の研究成果等３編が、世界 Top1%論文となっている。（中期計画 2-1-1-2） ● 戦略的国際共同研究ファンドの設立 国際水準の大学・研究機関等との国際共同研究を充実・加速させるために、東北大学と協定締結機関との両者から共同研究プロジェクトの推進経費をマッチングファンドで支援するプログラム「戦略的国際共同研究ファンド」を設立し、令和３年度末までに全 38 件のプロジェクトを推進している（総額４千５百万円規模)。その成果として、令和２年度末時点で、清華大学（中国）から 28 編、University College London（英国）から８編、ロレーヌ大学（仏国）から５編、計 41 編（令和元年度末時点８編、33 編の大幅増）の共著論文出版、清華大学から８件、University College London から３件、ロレーヌ大学から３件、計 14 件（令和元年度末時点３件、11 件の大幅増）の受賞、清華大学から 11 件、UCL から６件、ロレーヌ大学から１件、計 18 件・約６億円（令

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">和元年度末時点８件・約６千６百万円、10 件・約５億４千万円の大幅増）の外部資金獲得に繋がっている。（中期計画 2-1-1-3、5-1-1-1）
（特色ある点）
○　知のフォーラムによる研究力強化の実施
日本の大学で初めて本格導入された訪問滞在型研究プログラムである「知のフォーラム」事業により、世界第一線級の研究者（ノーベル賞・フィールズ賞受賞者等）を本学に招へいして「テーマプログラム」を開催する取組を通じ、国際共同研究や海外ベンチマーク校等への派遣により国際頭脳循環を推進している。（中期計画 2-1-1-3）
○　国際ジョイントラボセンターの設置
国際ジョイントラボセンターを新たに設置し、平成 27 年度に「日仏ジョイントラボラトリー（ELyT-Max）」、平成 30 年度に「東北大学－台湾 国立交通大学ジョイントラボセンター」、平成 28 年度に「東北大学－北京科技大学ジョイントラボセンター」を設置している。これまでの成果として、例えば日仏ジョイントラボラトリーにおいては、国際共著論文 34 報の発表、海外ファンディング機関からの競争的資金（6,000 万円超）をはじめ国内外の競争的資金を獲得している。（中期計画 2-1-1-3）</td></tr>
<tr><td>小項目 2-1-2</td><td colspan="2">判定</td><td>判断理由</td></tr>
<tr><td rowspan="3">経済・社会的課題に応える戦略的研究を推進する。</td><td>【４】</td><td>中期目標を達成し、優れた実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「社会的要請に応える戦略的研究の推進」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　社会的要請に応える戦略的研究の推進
世界に先駆けて開発した亜鉛リサイクル技術やアルツハイマー病治療薬シーズの開発など、既に、特許出願まで進んだ</td></tr>
</table>

	事例が多数あるとともに、東日本大震災の被災地の中心にある総合大学に求められる地域の復興・新生に関する課題、さらに、現在進行中の世界的課題の１つである新型コロナウイルスによる新規感染症対策等、時宜にかなった先導的な取組が社会からの関心を集めている。その取組について、『河北新報』の「東北大 30 の挑戦－社会にインパクトある研究」と題した連載記事掲載（平成 30 年１月開始）や、令和２年６月発刊の『東洋経済』において紹介されている。（中期計画 2-1-2-1） （特色ある点） ○　医薬品及び医療機器の開発シーズの実用化 医薬品及び医療機器の開発シーズの実用化に向けての取組における人材育成プログラムでは、平成 26 年３月から令和元年度末まで、受入企業は 46 社に及び、医療機器メーカーのみならず、電子機器、デバイス、材料、創薬及び IT 企業等多種多様な業種から参加している。これまでに 1,341 名を共同研究員として受け入れ、新たな医療機器・創薬等の開発のための人材育成を行っている。（中期計画 2-1-2-3） ○　企業との共同研究の増進 共同研究数を対平成 27 年度比で当初の目標を上回る約 43％以上増加（当初目標値 20％増）、（平成 27 年度 1,012 件、令和元年度 1,443 件）させるとともに、共同研究講座・共同研究部門の設置においても、対平成 27 年度比３倍（当初目標値２倍）に増加している。（中期計画 2-1-2-2） ○　研究シーズ登録数の増加 日本医療研究開発機構（AMED）事業における革新的医療技術創出拠点プロジェクトによる開発支援等により、シーズ登録数は順調に推移し、平成 27 年度末の 188 件から令和元年度末には 319 件に増加し、第３期中期目標期間の達成目標であった 250 件を上回っている。（中期計画 2-1-2-3） ○　新型コロナウイルス感染症に係る研究 島津製作所との共同研究により、「呼気オミックス」による新型コロナウイルス検査法の開発に成功している。呼気オミックスは、呼気の中に存在するウイルスや、生体由来のタンパク質、代謝物を解析する最先端技術であり、今後、新型コロナ対策のみならず、個別化医療、遠隔・在宅健康診断、各種疾病の診断・治療・未病予防等に応用し、展開していく予定である。

小項目 2-1-3	判定		判断理由
未来の産業創造・社会変革等に資する新興・融合分野など社会にインパクトある新たな研究領域を開拓する。	【３】	中期目標を達成している	・ 中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
	≪特記事項≫		
	該当なし		

（２）研究実施体制等に関する目標（中項目 2-2）

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「研究実施体制等に関する目標」に係る中期目標（小項目）２項目のうち、１項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」、１項目が「中期目標を達成している」であり、これらを総合的に判断した。

小項目 2-2-1	判定		判断理由
研究中心大学「東北大学」の研究基盤を強化する。	【３】	中期目標を達成している	・ 中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
	≪特記事項≫		
	該当なし		

<table>
<tr><th>小項目 2-2-2</th><th colspan="2">判定</th><th>判断理由</th></tr>
<tr><td rowspan="3">世界を牽引する最高水準の研究にチャレンジする体制を強化する。</td><td>【４】</td><td>中期目標を達成し、優れた実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「材料科学高等研究所がWPIに認定」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　材料科学高等研究所がWPIに認定
物質・材料分野の「材料科学高等研究所（AIMR)」は、平成19年に文部科学省の「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム（WPI)」による世界トップレベル研究拠点の一つとして採択され、「予見に基づく材料科学」のための新たな学術的基盤を開拓している。平成28年度の最終評価（和訳）では、「AIMRは非常に高いWPIプログラム基準を完全に達成し、傑出した世界の先導的研究所となった」と評価され、文部科学省は平成29年度からAIMRを新たに「WPIアカデミー拠点」に認定している。(中期計画2-2-2-1)
○　金属材料研究所の好業績
金属材料研究所は、「国際的な共同利用・共同研究拠点としての活動や発展性が高い」と評価され、平成30年度に文部科学大臣より「国際共同利用・共同研究拠点」の認定を受けている（全国４大学６拠点)。また、平成30年度に行われた共同利用・共同研究拠点の中間評価では、３期連続でS評価を得ている。(中期計画2-2-2-4)
（特色ある点）
○　知のフォーラム事業の推進
グローバルな連携ネットワークの構築による国際頭脳循環を加速するため、世界トップクラスの研究者を招へいする「知のフォーラム」事業において、平成28年度から令和元年度までに、テーマプログラム14件（年平均3.5件）と目標である年３件以上を実施しているほか、ジュニアリサーチ</td></tr>
</table>

	プログラム４件を開催し、共同研究 110 件、国際共著論文 71 編、国際会議 70 件、若手研究者を 277 名派遣している。（中期計画 2-2-2-2） ○　若手研究者の海外ベンチマーク大学への派遣 海外ベンチマーク大学（ベンチマーク校（６大学）・海外連携校（29 大学））への若手研究者の派遣では、研究大学強化促進事業「若手リーダー研究者海外派遣プログラム」において、令和元年度末までの派遣者数が 44 名となり、平成 25 年度から平成 27 年度末時点での７名に対して 37 名増となっている。また、海外ベンチマーク大学への国際共同大学院プログラムや各部局等の派遣プログラムを合わせた大学全体の派遣者数としては、第３期中期目標期間の累計値（令和元年度末時点）で 91 名となり、目標の 80 名を既に上回っている。（中期計画 2-2-2-2） ○　動物実験実施認証基準の完全取得 令和２年１月に非臨床試験に供する動物実験実施認証基準（AAALAC）の Full Accreditation を得ている。これは我が国の国公私立大学医学系教育・研究施設として、初めてであり、医学系の動物実験の国際標準化に寄与することとなっている。また、国際的な医療機器の非臨床試験実施の安全性信頼性確保の基準である GLP（Good Laboratory Practice）の認証取得に向けた準備を現在 PMDA と交渉している。日本で唯一、初となる GLP/AAALAC 基準施設の取得を目指し、近年問題となりつつある動物倫理問題を国際基準でクリアし、海外での医療機器認可にもデータを応用できる GLP 基準施設として、システムの具現化に取り組んでいる。（中期計画 2-2-2-3）

Ⅲ　社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育･研究に関する目標（大項目３）

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標」に係る中期目標（小項目）２項目のうち、２項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」であり、これらを総合的に判断した。

２．中期目標の達成状況

小項目 3-1-1	判定		判断理由
世界標準の産学マネジメントを推進し、産学間のパートナーシップを進める。	【４】	中期目標を達成し、優れた実績を上げている	・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。 ・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「知財マネジメントによる研究成果の活用促進」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。
	≪特記事項≫		
	（優れた点） ●　知財マネジメントによる研究成果の活用促進 総長裁量経費を投入し単独出願を戦略的に増やすとともに、知的財産部員を増員し、知財コンサルティング機能を強化することで、知的財産収入は令和３年度で 4.8 億円（令和元年度 2.4 億円、２倍）と大幅に増加している。（中期計画 3-1-1-1） （特色ある点） ●　大型の産学共創の加速 住友金属鉱山とのビジョン共創型パートナーシップや、愛知製鋼、ブリヂストンなどとの「共創研究所制度」の創設により、これまでの共同研究の域を超えた、大型の産学共創活動が結実し、令和３年度の共同研究費収入は 71 億円（令和元年度 51 億円、39.4%増）、共同研究講座・共同研究部門は令和３年度で 43 件（令和元年度 30 件、43.3%増）と急伸長		

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">を遂げている。（中期計画 3-1-1-1）
●　オープンイノベーション戦略機構による大型産学連携の推進
　産学連携企画・マネジメント全学組織「オープンイノベーション戦略機構」において、クリエイティブ・マネージャーが戦略的な企画・推進、事業化、社会実装までをハンズオン支援する OI 戦略機構指定プロジェクト数は、令和３年度で 20 件（令和元年度 10 件、２倍）と大幅に上回っている。その結果、令和３年度の実績は、共同研究契約等を 41 社・68 件・11.0 億円（令和元年度 11 社・31 件・2.2 億円、それぞれ 272.7%・119.4%・406.4%増）締結し、事業最終年度（令和４年度）の目標額である８億円を大幅に上回り、顕著に進捗している。（中期計画 3-1-1-1）</td></tr>
<tr><td>小項目 3-1-2</td><td colspan="2">判定</td><td>判断理由</td></tr>
<tr><td rowspan="3">　社会との連携及び社会への貢献を強化する。</td><td>【４】</td><td>　中期目標を達成し、優れた実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「災害科学分野における研究成果の躍進」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
●　災害科学分野における研究成果の躍進
　災害科学世界トップレベル研究拠点関係者における発表論文総数（Scopus 調べ）は着実に増加しており、令和３年は、「津波関係」、「災害教育」、「災害医療」の分野においてそれぞれ世界１位（令和元年：１位）、２位（令和元年：14 位）、３位（令和元年：12 位）となっている。さらに、災害科学国際研究所における令和３年の Top10%論文比率は 16.4%（令和元年：10.0%）となっている。（中期計画 3-1-2-1）
（特色ある点）
○　地域の防災・減災活動の推進
　宮城県・福島県の小学生を対象とした減災教育「結」プロ</td></tr>
</table>

	ジェクトでは、児童の災害時の対応力と判断力を高めることを目的として災害科学国際研究所等が開発した減災教育ツール「減災ハンカチ」及び「防災・減災スタンプラリー」を使用した出前授業を行っている。出前授業は宮城県・福島県を中心に毎年継続して令和元年度までに延べ 198 校の小学校で実施している。この取組が高く評価され、平成 29 年度に「ジャパン・レジリエンス・アワード（強靭化大賞）2018」金賞を受賞している。（中期計画 3-1-2-1）

Ⅳ　災害からの復興・新生に関する目標（大項目４）

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標を上回る顕著な成果が得られている

（判断理由）「災害からの復興・新生に関する目標」に係る中期目標（小項目）２項目のうち、２項目が「中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている」であり、これらを総合的に判断した。

２．中期目標の達成状況

<table>
<tr><th>小項目 4-1-1</th><th colspan="2">判定</th><th>判断理由</th></tr>
<tr><td rowspan="3">東日本大震災の被災地域の中心に所在する総合大学として、被災からの復興・新生に寄与する多彩な活動を展開する。</td><td>【５】</td><td>中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「民間との世界初の量子暗号通信の開発」、「臨床宗教師養成プログラムの推進」が優れた点として認められるなど「特筆すべき実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　民間との世界初の量子暗号通信の開発
令和２年１月、株式会社東芝との共同研究で、数百ギガバイトを超えるデータ量の全ゲノム配列データを、量子暗号通信を用いて伝送することに世界で初めて成功している。全ゲノム配列データのリアルタイム伝送を実現したことにより、量子暗号技術が大容量データの伝送に活用できること、またゲノム研究・ゲノム医療の分野において実用レベルで活用できることを実証している。（中期計画 4-1-1-1）
○　ジャポニカアレイの商業化
平成 29 年から令和元年度末までに SNP アレイで遺伝型決定が行われた合計約４万人分の生体試料・情報の分譲を開始している。４万人規模での一般住民の DNA、血漿、血清と健康調査情報及び SNP アレイ情報の分譲は、日本国内初であ</td></tr>
</table>

	り、これらの成果からジャポニカアレイ®の商業化が株式会社東芝によって実現化している。（中期計画 4-1-1-1） ○　臨床宗教師養成プログラムの推進 「死」の不安に対峙する人々やそうした人々を支える専門職を支援する人材に必要な知識を供給する場として、臨床宗教師研修、履修証明プログラム「臨床学教養講座」及び「臨床宗教実践講座」を開講しており、平成 27 年度修了者延べ 126 名に対して、令和元年度修了者延べ 258 名と約 2.05 倍に増加している。さらに、東北大学病院をはじめとする複数の医療機関において 21 名の修了者が臨床宗教師として勤務している。この取組は、全龍谷大学、上智大学等全国の大学に広がり、平成 30 年の日本臨床宗教師会による「認定臨床宗教師」の資格制度の設置に結実している。（中期計画 4-1-1-1） （特色ある点） ○　災害科学国際研究における共同研究の推進 平成 24 年度に「実践的防災学」の学術的価値を創成することをミッションとして、災害科学国際研究所を設置し、国内外の研究機関、関連企業・団体及び被災自治体等と連携し、文系・理系の垣根を越えた多彩な研究にも取り組んでいる。震災直後から継続的に推進してきた「災害科学国際研究推進プロジェクト」が、民間企業等の共同研究につながっており、平成 27 年度共同研究受入件数が 9 件に対し、令和元年度は 24 件となり約 2.7 倍に増加している。（中期計画 4-1-1-1） ○　バイオバンクを活用した共同研究の増加 15 万人のゲノムコホート調査のリクルート目標が達成され、地域住民コホート及び三世代コホートの健康情報の蓄積が進み、我が国の三大バイオバンクの地位を確立している。これらの試料・情報提供数を令和元年度 6.8 万人分に拡大し、それらの分譲件数も平成 27 年度 1 件から、令和元年度までには 32 件に増加している。さらに分譲に関係する共同研究数も第 2 期中期目標期間 64 件から、第 3 期中期目標期間 74 件と増加（約 116%増）している。（中期計画 4-1-1-1） ○　原子炉廃止措置工学プログラムによる人材育成 原子炉廃止措置基盤研究センター（平成 28 年 12 月設置）の「原子炉廃止措置工学プログラム」（文部科学省委託事業

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">「英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業廃止措置研究・人材育成等強化プログラム」に採択）において、安全な廃止措置を担う中核人材を養成し、令和元年度までのプログラム修了生は 79 名になり、半数以上が、日本原子力研究開発機構、東京電力及び鹿島建設等廃炉に関係する機関を進路としている。本委託事業は、令和元年度の事後評価においてＳ評価を獲得している。（中期計画 4-1-1-2）</td></tr>
<tr><td>小項目 4-1-2</td><td colspan="2">判定</td><td>判断理由</td></tr>
<tr><td rowspan="3">東日本大震災で得られた教訓・知見を世界に発信・共有し、課題を解決する新たな知を創出し、国際社会に貢献する多彩な活動を展開する。</td><td>【５】</td><td>中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「津波被害のリアルタイム予測技術の運用開始」、「大規模バイオバンクの構築」が優れた点として認められるなど「特筆すべき実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　津波被害のリアルタイム予測技術の運用開始
津波の浸水による被害推定について、スーパーコンピュータを用いて行うリアルタイム津波浸水被害予測技術は、内閣府総合防災情報システム「津波浸水被害推計システム」として正式に採用され、平成 30 年４月より本格運用を開始している。これに関連して、本技術の普及を目的とした東北大学発ベンチャー「RTi-cast」を平成 30 年３月に設立している。（中期計画 4-1-2-1）
○　民間企業との新たな防災・減災技術の開発
災害科学国際研究所が平成 30 年に日本電信電話（NTT）と連携し、２つの研究テーマ（「震災アーカイブを活用した社会課題解決型サービスデザイン手法の研究」及び「リアルタイム津波浸水被害予測を活用した意思決定支援手法の研究」）に取り組み、共同研究成果を活用した「ステルス防災」の商標出願及び共同特許出願（復旧計画策定装置、手</td></tr>
</table>

	法、プログラム）を実現している。特許件数においては、第２期中期目標期間の 17 件から第３期中期目標期間は 23 件に約 1.35 倍増となり、新たな防災・減災技術の開発を推進している。（中期計画 4-1-2-1） ○　大規模バイオバンクの構築 平成 28 年度には、当初計画 15 万人のゲノムコホート調査のリクルート目標が達成され、平成 29 年度から本コホート参加者の詳細二次調査を開始し、コホート調査を基盤としたバイオバンクは平成 29 年度末時点で、約 300 万本の生体試料を収納し、本邦における三大バイオバンクの位置を確立している。さらに、令和元年度末には、この生体試料の収納を約 400 万本までに拡大している。（中期計画 4-1-2-1） （特色ある点） ○　日本災害 DIGITAL アーカイブの発信 ハーバード大学（米国）のライシャワー日本研究所との連携により、大震災の知見や教訓をアーカイブにまとめ、累積利用数は平成 27 年度から増加している。「津波痕跡データベース」の保有数も、毎年一定数が研究資料として共同利用され、震災アーカイブ・災害統計データの集積数については、平成 27 年度 40 万点であったが、令和元年度は 93 万点と約 2.3 倍に増加している。（中期計画 4-1-2-1） ○　マルチハザードプログラムの展開 APRU（環太平洋大学協会）と災害科学国際研究所が共同で、APRU 等のネットワークや国際機関と協働した国際会議の開催支援や国際会議等での政策提言を目指した活動（人材育成）を行う APRU-IRIDeS マルチハザードプログラムを立ち上げている。本プログラム参加国・参加者数は、第２期中期目標期間の延べ 26 か国 123 名が、第３期中期目標期間（平成 28 年度～令和元年度）は延べ 47 か国 191 名となり、参加国・参加者数ともに増加している。（中期計画 4-1-2-1）

Ⅴ　その他の目標（大項目５）

１．評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「その他の目標」に係る中期目標（中項目）が１項目であり、当該中項目が「中期目標を上回る成果が得られている」であることから、これらを総合的に判断した。

２．中期目標の達成状況

（１）グローバル化に関する目標（中項目 5-1）

【評価結果】中期目標を上回る成果が得られている

（判断理由）「グローバル化に関する目標」に係る中期目標（小項目）３項目のうち、１項目が「中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている」、１項目が「中期目標を達成し、優れた実績を上げている」、１項目が「中期目標を達成している」であり、これらを総合的に判断した。

小項目 5-1-1	判定		判断理由
国際連携推進機構の下で、国際化環境整備を推進する。	【３】	中期目標を達成している	・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
	≪特記事項≫		
	（優れた点） ●　国際サポート体制の充実 コロナ禍において、留学生に対するきめ細かな支援をより一層充実するため、学生スタッフによるピアサポート「留学生ヘルプデスク」を令和２年６月にオンライン化している。日常の学業・生活面でのサポートに加えて、特別定額給付金の申請や学内のコロナ支援制度の詳細など、多様な留学生支援を展開している。 これらのオンラインを活用したサポート体制の強化等により、博士後期課程での留学生比率は平成 28 年度の 22.6%から令和３年度は 30.2%まで向上しており、指定国立大学法人構想の参考指標として掲げる「2030 年度までに博士後期課程での留学生比率 35%」の令和３年度の目標値を大幅に上回		

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">って達成している。（中期計画 5-1-1-1）</td></tr>
<tr><td>小項目 5-1-2</td><td colspan="2">判定</td><td>判断理由</td></tr>
<tr><td rowspan="3">学生の流動性の向上とグローバルリーダー育成のためのグローバルな修学環境を整備する。</td><td>【４】</td><td>中期目標を達成し、優れた実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「外国人留学生の 3,000 名に拡充」が優れた点として認められるなど「優れた実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　外国人留学生の 3,000 名に拡充
留学生への教育メニューの充実と修学環境整備等により、外国人留学生数は、第２期中期目標期間の平成 27 年度の 2,938 名から、令和元年度で、第３期中期目標期間として掲げた 3,000 名を上回る 3,548 名となっている。（中期計画 5-1-2-1）
●　海外留学体験学生の年間 1,000 名に拡大
「オンライン海外留学」による単位取得を伴う海外留学体験学生数は、令和３年度末時点で 1,018 名（令和元年度：824 名）と大きく増加し、中期計画に掲げる「第３期中期目標期間中に単位取得を伴う海外留学体験学生を年間 1,000 人に拡大」を達成している。また、文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業「単位取得を伴う海外留学経験者数」（日本学術振興会の資料）における全学生数に占める割合は、コロナ禍においても、１位（旧七帝大中）を維持（平成 30～令和２年度）している。（中期計画 5-1-2-2）
（特色ある点）
○　国際混住型学生寄宿舎の整備
ユニバーシティ・ハウスには「国際感覚の研鑽」として、日本人学生及び外国人留学生が日常的な交流を通して、国際感覚を身につけるとともに、異文化理解を言語や文化の異なる学生同士の交流の中で深めるというハウスコンセプトがある。平成 30 年７月にユニバーシティ・ハウス青葉山（752</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">戸）が完成したことにより、1,720 戸の国際混住型学生寄宿舎が整備され、国際混住型学生寄宿舎に入居している外国人留学生数は平成 27 年度の 277 名から令和元年度には 715 名に増加している。（中期計画 5-1-2-1）
○　留学生支援・就学環境の整備
外国人留学生向けの経済支援策として、独自の財源で「東北大学総長特別奨学金」制度、「東北大学グローバル萩博士学生奨学金」等を整備するとともに、国際交流サポート室による渡日前の留学生に対する在留資格認定証明書の全学一括申請のシステム化、生活面の支援と目的とした「留学生ヘルプデスク」の開設、「東北大学留学生住宅保証制度」、英会話可能なカウンセラーの配置等留学生就学環境の整備を充実させている。（中期計画 5-1-2-1）</td></tr>
<tr><td>小項目 5-1-3</td><td colspan="2">判定</td><td>判断理由</td></tr>
<tr><td rowspan="3">徹底した「大学改革」と「国際化」を全学的に断行することで国際通用性を高め、ひいては国際競争力を強化するとともに、世界的に魅力的なトップレベルの教育研究を行い、世界三十傑大学を目指すための取組を進める。</td><td>【５】</td><td>中期目標を達成し、特筆すべき実績を上げている</td><td>・　中期計画の判定がすべて「中期計画を実施している」以上であり、かつ、中期計画の実施により、小項目を達成している。
・　また、特記事項を判断要素とし、総合的に判断した結果、「国際共同大学院プログラムの充実」、「外国人教員増のための環境整備」が優れた点として認められるなど「特筆すべき実績」が認められる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">≪特記事項≫</td></tr>
<tr><td colspan="3">（優れた点）
○　国際共同大学院プログラムの充実
国際共同大学院プログラムとして、①スピントロニクス分野に続き、②環境・地球科学分野、③データ科学分野、④宇宙創成物理学分野、⑤生命科学（脳科学）分野、⑥機械科学技術分野、⑦日本学分野、⑧材料科学分野及び⑨災害科学・安全学分野など、目標としていた９プログラムを完成させ、プログラムに係る在籍者数は、平成 27 年度の７名から令和元年度には 197 名(28 倍)に増加、海外派遣者数は、派遣が始まった平成 28 年度の４名から令和元年度には 120 名（30 倍)、また、海外受入学生数についても、平成 27 年度の２名</td></tr>
</table>

	から令和元年度には 296 名(148 倍)になっている。(中期計画 5-1-3-1) ○　外国人教員増のための環境整備 　第３期中期目標期間中に外国人教員等を 1,000 人以上に拡大するために、①「外国人教員雇用促進経費」、②「クロスアポイントメント活用促進支援制度」、③「若手女性・若手外国人特別教員制度」、④外国人研究者の子供に係る入学金・授業料の支援等の取組を新たに導入し、推進している。その結果、外国人教員等数は、平成 27 年度の 888 名から令和元年度には 1,034 名になっている。(中期計画 5-1-3-3) （特色ある点） ○　外国人留学生の受入体制の整備 　国際学位コースは、平成 29 年度から令和元年度にかけて文部科学省国費外国人優先配置プログラムを積極的に活用し、７プログラムが採択（国内第２位）されている。採択プログラムから受け入れた国費留学生は平成 30 年度 32 名、令和元年度 66 名に増加しており、令和元年度までの国際コース設置率も全学位コースの 65%を超え（博士学位コースは約９割)、令和５年度目標である 75%達成に向けて推移している。(中期計画 5-1-3-1)

東北大学

≪判定結果一覧表≫

中期目標(大項目) 中期目標(中項目) 中期目標(小項目) 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	(参考)4年目終了時評価の判定
大項目1 **教育に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00 うち現況分析結果加算点 0.25	【4】
中項目1-1 **教育内容及び教育の成果等に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【4】
小項目1-1-1 現代社会の課題に挑戦するグローバルリーダー育成の基盤となる学士課程から大学院課程に至る高度教養教育を確立・展開する。	【4】	優れた実績を上げている	3.00	【4】
中期計画1-1-1-1 【01】現代的課題に挑戦する基盤となる先端的・創造的な高度教養教育の確立・展開 学生がグローバルリーダーの基盤となる人間性及びグローバルな視野を養い、専門分野の基礎を確立し、大学院での新興・異分野融合研究を創造していくため、地球規模の現代的課題、サイバーセキュリティなど現代社会に必要なリテラシーの修得に多角的に取り組む授業科目群の開発・提供、高大接続から学士課程・大学院課程を見据えた授業科目の配置、情報通信技術(ICT)の活用による学習方法の提供、学生相互による学習支援、グローバルリーダーを支えるキー・コンピテンシーの醸成をはじめとする学部初年次教育から大学院にわたる高度教養教育を確立・展開する。特に、アクティブ・ラーニングによる授業科目「展開ゼミ」の開講クラス数を平成30年度までに90クラスまで増加させる取組を進めるとともに、全学教育においてICTを利用する授業を80パーセントに引き上げる。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
小項目1-1-2 高度な専門性と分野を超えた鳥瞰力を持って新しい価値を創出できる指導的人材を育成するため、高度教養教育との密接な連携及び海外大学との共同教育の下で、学部専門教育・大学院教育を推進する。	【4】	優れた実績を上げている	2.83	【4】
中期計画1-1-2-1 【02】学部専門教育の充実 学生がグローバルリーダーの基盤となる専門分野の基礎を確立するため、全ての課程で平成29年度からカリキュラムマップを導入・活用することにより教育プログラムの全学的構造化を図り、PBL(Project-BasedLearning)型授業等によるアクティブ・ラーニングの拡充、学生の学修時間の確保・増加、学生の自律的学習姿勢の強化のための学修成果の可視化などを通じた学部専門教育の充実化を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画1-1-2-2 【03】大学院教育の充実 グローバルな視野の下で、新しい価値を創造できる研究者等の養成並びに高度な専門的知識・能力及びその汎用力を持つ高度専門職業人の養成を図るため、明確な人材養成像の下で、研究科や専攻の枠を超えた幅広いコースワークに基づく学位プログラムの提供、産学のネットワークを活かした協働のカリキュラムの開発・実施、学位の質保証のための研究倫理教育と論文審査体制の整備などを通じた大学院教育の充実化を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画1-1-2-3 【04】高度教養教育と専門教育との有機的連携 高度教養教育と専門教育との密接な連携の下で、学部・大学院の一貫した教育プログラムを実践し、多様なキャリアパス教育を進める。	【2】	実施している		【2】
中期計画1-1-2-4 【05】厳正かつ適切な成績評価・学位審査の実施 成績評価・学位審査を厳正かつ適切に実施し、国際通用性を見据えた学位を保証するため、全学教育に関するPDCAサイクルを継続して運用するとともに、「博士学位論文提出のための指針」に基づく論文剽窃防止の取組を強化する。	【3】	優れた実績を上げている		【2】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
中期計画1-1-2-5 【06】社会人の学び直しの支援 社会人の学び直しに資するため、「アカデミック・リーダー育成プログラム」等の履修証明プログラム及び大学院の教育課程における社会人向けの実践的・専門的な教育プログラムを検討・実施し、社会人の学び直しの機会を提供するとともに、その活動を広く社会に発信する。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
中期計画1-1-2-6（◆） 【07】世界を牽引する高度な人材の養成 世界を牽引する高度な人材の養成のため、学位プログラム推進機構の下で、スピントロニクス分野、データ科学分野をはじめとする海外の有力大学との協働による「国際共同大学院プログラム」、産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くための「博士課程教育リーディングプログラム」、異分野を融合した新しい研究分野で世界トップレベルの若手研究者を養成する学際高等研究教育院の教育プログラム等の学位プログラムを15プログラムに拡大し、これらを「東北大学高等大学院機構（仮称）」として組織する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中項目1-2 **教育の実施体制等に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【4】
小項目1-2-1 教育の大学IR(Institutional Research)機能を活用した全学的教学マネジメントの下で、教養教育・学部専門教育・大学院教育の実施体制等を整備・充実するとともに、国際通用性の高い教育システムの開発を行い、教育の質を向上させる。	【4】	優れた実績を上げている	2.60	【4】
中期計画1-2-1-1 【08】教養教育の実施体制等の整備・充実 全学的教育・学生支援体制として構築した高度教養教育・学生支援機構と部局等との緊密な協働の下で、大学IR(Institutional Research)機能の活用及び教育実践に関する開発・実施を一体的に進め、全学的教学マネジメントを展開する。	【2】	実施している		【2】
中期計画1-2-1-2 【09】多様な教員構成の確保 教員の多様性を確保するため、外国人教員等の増員、年齢構成、ジェンダーバランス、実務経験等にも配慮した適切な教員配置を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画1-2-1-3 【10】国際通用性の高い教育システムの開発 学生の学ぶ意欲を刺激する国際通用性の高い教育システムを構築するため、平成28年度からの全学部入学者へのGPA(Grade Point Average)制度の適用及び全授業科目のナンバリングの活用、第3期中期目標期間中早期からのクォーター制を活かした学事暦の柔軟化について、順次実施する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画1-2-1-4 【11】教育の質の向上方策の推進 組織としてのPDCAサイクル及び授業科目等に対する授業担当教員のPDCAサイクルを通じて教育の質の向上を図る改善活動を継続的に推進するため、学生による授業評価結果の授業改善活動への活用、授業科目のマネジメントを行う担当責任者に対するFD(Faculty Development)の年2回以上の実施などの取組を進める。	【2】	実施している		【2】
中期計画1-2-1-5 【12】教育関係共同利用拠点の機能強化 教育関係共同利用拠点として大学教育全体の多様かつ高度な教育の展開に寄与するため、本学が有する人的・物的資源の有効活用を図り、平成32年度までに教員の専門教育指導力を育成するプログラムの新規開発・提供を行うとともに、食と環境のつながりを学ぶ講義・実習の改善、海洋生物学の素養を備えた人材を育成する臨海実習の拡充など、他大学等へ提供する共同利用プログラムの強化を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
中項目1-3 **学生への支援に関する目標**	【3】	達成している	3.00	【3】
小項目1-3-1 国際混住型学生寄宿舎の整備・拡充をはじめとする経済的支援、生活支援、キャリア支援及び課外活動支援を柱とした障害者を含む学生への支援機能を強化する。	【3】	達成している	2.75	【3】
中期計画1-3-1-1（★） 【13】学生への経済的支援制度の拡充と学生寄宿舎の整備・充実 学生への経済的支援を強化するため、本学独自の奨学金制度等を拡充するとともに、国際的な環境の中で多様な価値観・文化を尊重しつつ自己を確立する場として、日本人学生と外国人留学生の国際混住型学生寄宿舎(ユニバーシティ・ハウス)の定員を対平成27年度比で2倍を目途に整備・拡充を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画1-3-1-2 【14】安心で健康な学生生活支援の取組強化 全ての学生が安心で健康な学生生活を送ることができる環境を確保するため、発達障害、身体障害等の障害のある学生に対する支援措置の充実・強化を進めるとともに、ハラスメント対策の強化及びメンタルケア体制の拡充を進める。	【2】	実施している		【2】
中期計画1-3-1-3 【15】進学・就職キャリア支援の推進 学生への進学・就職支援を強化するため、業界研究セミナー・大学院進学セミナー・キャリア形成ワークショップ等の体系的提供、学部初年次からの一貫したキャリア指導など全ての学生及び博士研究員(ポスドク)に対する総合的な就職キャリア支援の取組を推進するとともに、学生の博士後期課程への進学を支援するため、企業等との組織的連携を更に進めて「イノベーション創発塾」等を継続・拡充する。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
中期計画1-3-1-4 【16】課外活動支援の拡充 学生が人間関係を育み、社会性を身に付ける上で有用な課外活動を支援するため、「全学的教育・厚生施設整備計画」に基づく運動場の人工芝化等の施設環境の整備、全学的な応援への取組、表彰制度の整備等を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中項目1-4 **入学者選抜に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【4】
小項目1-4-1 アドミッションポリシーに適合する、優秀で意欲的な学生が国内外から受験する入試戦略を展開し、より多面的・総合的な選抜を実施する。	【4】	優れた実績を上げている	3.00	【4】
中期計画1-4-1-1（★） 【17】学生募集力の向上 東北大学進学への募集活動を強化するため、教育内容・進路状況・研究成果等の情報提供を促進し、説明会・オープンキャンパス・移動講座等を開催するとともに、優秀な外国人留学生を受け入れるため、英語ウェブページによる発信力の強化、海外拠点を利用したリクルート活動等を展開する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画1-4-1-2（◆） 【18】アドミッションポリシーに適合する入学者選抜方法の改善 多様な学生の確保を目指したアドミッションポリシーに適合する学生を確保するため、30パーセントを目指したAO入試による入学定員の拡大、国際バカロレア入試や日本人学生を対象に英語で学習するためのグローバル入試等の導入、TOEFL等の外部試験の入試への活用をはじめとする入学者選抜方法の継続的な点検・改善を進めるほか、国際学士コースについては、海外拠点の利用を含む海外現地入試を引き続き行うとともに、海外における教育課程を踏まえた柔軟な入学者選抜方法の改善を継続的に進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
大項目2 **研究に関する目標**	【5】	顕著な成果が得られている	4.29 うち現況分析結果加算点 0.54	【5】
中項目2-1 **研究水準及び研究の成果等に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【4】
小項目2-1-1 長期的視野に立つ基盤研究及び世界を牽引する最高水準の研究を推進する。	【5】	特筆すべき実績を上げている	3.00	【5】
中期計画2-1-1-1 【19】長期的視野に立脚した基礎研究の充実 イノベーションの源泉となる基礎研究の重要性及び基礎研究・応用研究の不可分性に照らし、研究者の自由な発想による独創性のある研究を支援・推進する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画2-1-1-2（★） 【20】世界トップレベル研究の推進 世界トップレベルの研究拠点の形成・展開を図るため、世界をリードする研究を重点的に推進し、被引用度の高い論文数を対平成27年度比で20パーセント以上増加させ、世界50位以内に入る研究領域を拡大する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画2-1-1-3（◆） 【21】国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進 本学における材料科学、スピントロニクス、未来型医療、災害科学等の分野の強み・特色を最大限に活かし、国際競争力の一層の強化を図るため、国際水準の大学・研究機関等との学術ネットワークの充実、海外拠点の利活用、世界最高水準の外国人研究者の招へい等を進めて世界的研究拠点を形成し、最先端の国際共同研究を推進して、国際共著論文数を対平成27年度比で20パーセント以上増加させるとともに、国際会議の主催・招待講演等を通じて研究成果の発信を行う。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
小項目2-1-2 経済・社会的課題に応える戦略的研究を推進する。	【4】	優れた実績を上げている	2.67	【4】
中期計画2-1-2-1 【22】経済・社会的課題に応える戦略的研究の推進 経済・社会的ニーズと大学の多様な研究シーズを組み合わせ、エネルギー・資源の確保、超高齢社会への対応、地域の復興・新生、安全・安心でかつ持続可能な社会の実現など経済・社会的課題に応える戦略的研究を推進する。	【2】	実施している		【2】
中期計画2-1-2-2（★） 【23】イノベーション創出を実践する研究の推進 産学が開かれた知の共同体を形成し、ナノテクノロジー・材料、ライフサイエンス、情報通信、環境、エネルギー、ものづくり、社会基盤等に関する世界最高水準の独創的着想に基づく研究を推進するため、企業等との共同研究数を対平成27年度比で20パーセント以上増加させるとともに、共同研究講座・共同研究部門を2倍に増加させ、イノベーション創出プログラム(COISTREAM)拠点及び国際集積エレクトロニクス研究開発センターに代表される大型産学連携研究を拡充する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画2-1-2-3（★） 【24】トランスレーショナルリサーチの促進 生命科学・医工学分野の基礎研究成果の実用化を促進するため、メディカルサイエンス実用化推進委員会等が中心となって全学の研究シーズ登録数を第3期中期目標期間中に250件以上に増加させるとともに、トランスレーショナルリサーチ(基礎から臨床への橋渡し研究)を推進し、大学発の革新的な医薬品及び医療機器の開発シーズの実用化を進展させる。	【3】	優れた実績を上げている		【3】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
小項目2-1-3 未来の産業創造・社会変革等に資する新興・融合分野など社会にインパクトある新たな研究領域を開拓する。	【3】	達成している	2.00	【3】
中期計画2-1-3-1 【25】新たな研究フロンティアの開拓 社会にインパクトある研究を推進するため、細分化された知を俯瞰的・総合的に捉える場を形成し、本学が強みを有する研究・技術要素の一層の強化及びその統合・システム化などの取組を進め、新規研究領域を継続的に開拓して、新興・融合分野研究への挑戦を重点的に支援する。	【2】	実施している		【2】
中項目2-2 **研究実施体制等に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	3.50	【4】
小項目2-2-1 研究中心大学「東北大学」の研究基盤を強化する。	【3】	達成している	2.00	【3】
中期計画2-2-1-1 【26】多彩な研究力を引き出して国際競争力を高める環境・推進体制の整備 戦略的視点から革新的かつ創造的な研究プロジェクト等を企画・推進するため、リサーチアドミニストレーター(URA)機能の強化など全学的視点から研究推進体制の充実を進めるほか、国際リニアコライダー(ILC)、中型高輝度放射光施設などイノベーションの基盤となる最先端の研究施設の東北地方への誘致活動について寄与する。	【2】	実施している		【2】
中期計画2-2-1-2 【27】世界をリードする優れた研究者等の確保 ワールドクラスの研究者や必要な人材を国内外から産業界を含め広く確保するため、適切な業績評価による処遇反映の仕組みを整備・活用することにより、対平成27年度比で適用例2倍増を目指したクロスアポイントメント制度及び年俸制適用率30パーセント以上を目指した年俸制の活用を促進する。	【2】	実施している		【2】
中期計画2-2-1-3 【28】優れた若手・女性・外国人研究者の積極的登用 優れた若手・女性・外国人研究者が活躍する研究基盤を構築するため、自立的な研究環境の提供を前提とした国際公募による学際科学フロンティア研究所における50名程度の若手研究者のポストの確保及びその他の全学的な人件費の適切なマネジメントによる若手研究者のポストの確保に基づく若手教員比率26.4パーセントを目指した若手教員の雇用の促進、女性研究者の対平成27年度比で50パーセント以上の増員を目指した女性研究者支援の取組の加速化のほか、外国籍教員の対平成27年度比で30パーセント以上の増員及び新たに採用する教員の1割以上のテニュアトラック制の適用を進める。	【2】	実施している		【2】
中期計画2-2-1-4 【29】技術系研究支援者のキャリア形成の促進 多彩で高度専門性を有する技術系研究支援者のキャリア形成を促進するため、専門分野間の技術交流・人事交流及び海外研修を含む先進的な技術開発等に関する研修を通じて、意欲を持って継続的に成長できる就業環境を提供する。	【2】	実施している		【2】
小項目2-2-2 世界を牽引する最高水準の研究にチャレンジする体制を強化する。	【4】	優れた実績を上げている	2.50	【4】
中期計画2-2-2-1（◆） 【30】世界最高水準の最先端研究機構群の設置 本学の総力を挙げて最先端研究に取り組むため、研究組織をミッション別に三階層化した基盤体制(研究イノベーションシステム)を構築し、その第一階層となる高等研究機構に設置した物質・材料分野(材料科学高等研究所)の強化を着実に進め、高等研究機構に新たな分野・研究組織等を順次整備して、世界最高水準の研究環境及び研究支援体制を拡充するとともに、高等研究機構と研究科・附置研究所等との有機的な連携を促進する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
中期計画2-2-2-2 【31】グローバルな連携ネットワークの発展 国際的な頭脳循環を促進するため、海外拠点・リエゾンオフィス等の戦略的な整備・活用、これまで築いてきたネットワークの連携強化、海外ベンチマーク大学への若手研究者の派遣（延べ80名以上）、リサーチレセプションセンターによる訪問者の支援、世界トップクラスの研究者を招へいする「知のフォーラム」事業の推進(年平均3件以上)等を通して、グローバルな連携ネットワークを発展させる。	【2】	実施している		【2】
中期計画2-2-2-3 【32】附置研究所等の機能強化 附置研究所等が学術研究の動向や経済社会の変化に対応しながらその機能を十分に発揮し、高い研究水準を維持する学術研究の中核研究拠点としての使命を遂行するため、研究支援体制の充実など業務運営の更なる強化を進める。	【2】	実施している		【2】
中期計画2-2-2-4 【33】国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点の機能強化 国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点が大学の枠を超えて学術研究の中核として全国的な研究レベルの向上に寄与するとともに本学の強み・特色の重点化にも貢献するため、材料科学、情報通信、加齢医学、流体科学、物質・デバイス科学、計算科学、電子光理学等の強みを活かして、国内外の研究機関との連携をはじめとする開かれた共同利用・共同研究の組織的推進など業務運営の更なる強化を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
大項目3 **社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【3】
	なし	－	―	なし
小項目3-1-1 世界標準の産学マネジメントを推進し、産学間のパートナーシップを進める。	【4】	優れた実績を上げている	3.00	【3】
中期計画3-1-1-1（◆） 【34】世界標準の産学連携マネジメントの推進 大学の研究成果を企業等と連携したイノベーション創出につなげるため、世界標準の産学連携マネジメントを推進する産学連携機構の整備・充実を進めるとともに、組織的産学連携を促進するプレマッチングファンド制度の拡充、青葉山新キャンパスの環境を活用して産学連携組織群を集約するアンダー・ワン・ルーフ型産学連携拠点の構築、「産学連携特区(仮称)」制度の構築、「共同研究講座・共同研究部門」の対平成27年度比で2倍増、人文社会科学分野の積極的な参画による産学連携に関する政策提言機能の整備、産学連携マネジメントを担う高度人材の実践的な育成プログラムの構築等を通じて、産学間のパートナーシップを進める。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
小項目3-1-2 社会との連携及び社会への貢献を強化する。	【4】	優れた実績を上げている	3.00	【3】
中期計画3-1-2-1 【35】社会連携活動の全学的推進 大学と社会をつなぐ窓口機能及び本学の学生・教職員による積極的な社会連携活動の支援機能の強化を図り、国・自治体・企業等との連携を更に促進し、社会の課題解決、地域活性化、政策立案等の社会ニーズを捉えた取組を進める。特に、東日本大震災を経験した総合大学としての知見と経験を活かして、宮城県・福島県の小学生を対象に実施している減災教育を継続・拡充するなど地域の防災・減災活動の取組を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
中期計画3-1-2-2 【36】知縁コミュニティの創出・拡充への寄与 本学の施設、学術資源等を広く活用しつつ、サイエンスカフェやリベラルアーツサロンなどの市民の知的な関心を受け止め、支え、育んでいける教育研究活動等を継続・拡充するとともに、自治体・メディア等との連携により地域の文化創造・交流の中核となる取組を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【2】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
大項目4 **災害からの復興・新生に関する目標**	【5】	顕著な成果が得られている	5.00	【5】
	なし	－	―	なし
小項目4-1-1 東日本大震災の被災地域の中心に所在する総合大学として、被災からの復興・新生に寄与する多彩な活動を展開する。	【5】	特筆すべき実績を上げている	3.00	【5】
中期計画4-1-1-1 【37】東北大学復興アクションの着実な遂行 東日本大震災からの復興・新生に資する成果を創出するため、災害復興新生研究機構と部局等との協働の下で、被災地域の課題を踏まえ、地域の特色や資源を活用した研究・人材育成・新産業創出等の取組を継続的に推進し、それらの活動を国内外に発信する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画4-1-1-2 【38】復興に長期を要する被災地域への貢献 福島第一原子力発電所の事故により復興に長期を要する被災地域の再生のため、廃炉・環境回復の分野をはじめとするこれまでの取組等を活用する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
小項目4-1-2 東日本大震災で得られた教訓・知見を世界に発信・共有し、課題を解決する新たな知を創出し、国際社会に貢献する多彩な活動を展開する。	【5】	特筆すべき実績を上げている	3.00	【5】
中期計画4-1-2-1（◆） 【39】科学的知見に基づく国際貢献活動 東日本大震災で得られた教訓・知見や世界に先駆けて開拓する災害科学の新たな知を世界各国の課題解決に資するため、これまで築いてきた国内外の連携ネットワークを活用し、新たな防災・減災技術の開発、震災アーカイブ・災害統計データの集積・提供、バイオバンク固有の問題解決とメディカル・メガバンク先進モデルの提供、海洋生物資源の保全・活用などの科学的知見による開かれた貢献活動を展開する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
大項目5 **その他の目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【4】
中項目5-1 **グローバル化に関する目標**	【4】	上回る成果が得られている	4.00	【4】
小項目5-1-1 国際連携推進機構の下で、国際化環境整備を推進する。	【3】	達成している	2.67	【3】
中期計画5-1-1-1 【40】国際競争力向上に向けた基盤強化 国際競争力向上に向けた基盤強化を図るため、国際連携推進機構と部局等との協働の下で、海外拠点の整備・利活用、国際交流サポート体制の強化をはじめとする国際化環境整備を推進する。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
中期計画5-1-1-2 【41】国際発信力の強化 国際発信力を強化するため、英語による全学的広報業務を担う専任スタッフを拡充し、クオリティーの高い情報コンテンツの実現とウェブページ、ソーシャルメディア等の活用により受け手に応じた適切な情報発信を推進するとともに、海外拠点、コンソーシアム等を活用し多様な機関等との連携による情報発信体制を強化するほか、海外の同窓会との連携、国際シンポジウムの開催・招致などの取組を強化する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】

中期目標（大項目） 中期目標（中項目） 中期目標（小項目） 中期計画	判定		下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値 ※	（参考）4年目終了時評価の判定
中期計画5-1-1-3 【42】グローバルネットワークの形成・展開 教職員・学生の国際流動性の向上及び教育・研究における国際連携推進に資するグローバルネットワークの戦略的強化のため、海外拠点・学術交流協定校の拡充及びコンソーシアムの更なる活用を進める。	【2】	実施している		【2】
小項目5-1-2 学生の流動性の向上とグローバルリーダー育成のためのグローバルな修学環境を整備する。	【4】	優れた実績を上げている	3.00	【4】
中期計画5-1-2-1（★） 【43】外国人留学生の戦略的受入れと修学環境の整備 第3期中期目標期間中に通年での外国人留学生を3,000人に拡大するため、これまでの実績を活かして重点的な地域・分野・プログラム等を内容とする留学生受入れ戦略を基に、教育プログラムの充実、留学生の支援措置の拡充など就学環境の更なる整備を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画5-1-2-2（★） 【44】本学学生の海外留学と国際体験の促進 第3期中期目標期間中に単位取得を伴う海外留学体験学生を年間1,000人に拡大するため、入学前海外研修プログラム、短期海外研修プログラム(スタディアブロードプログラム)、協定校交換留学プログラム、研究型海外研鑽プログラム等を実施するとともに、海外留学・海外インターンシップの促進体制の更なる整備を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
中期計画5-1-2-3 【45】異文化の理解と実践的なコミュニケーション能力の養成 グローバルに活躍できる人材の育成のため、言語や文化の異なる多様な人々と協調しつつ自己の主張を的確に相手に伝え問題解決に導く高度なコミュニケーション能力を涵養できる教育プログラムを開発・展開するとともに、英語をはじめとする語学教育を強化する。	【3】	優れた実績を上げている		【2】
小項目5-1-3 徹底した「大学改革」と「国際化」を全学的に断行することで国際通用性を高め、ひいては国際競争力を強化するとともに、世界的に魅力的なトップレベルの教育研究を行い、世界三十傑大学を目指すための取組を進める。	【5】	特筆すべき実績を上げている	3.00	【5】
中期計画5-1-3-1 【46】国際通用性の向上 スーパーグローバル大学創成支援「東北大学グローバルイニシアティブ構想」事業の目的達成に向けて、総長を本部長とする推進本部の下で、平成35年度中に国際コース設置率を75パーセントに拡大する等の教育プログラムの国際通用性の向上、国際共同大学院プログラムをはじめとする国際連携による教育力強化、教員の多様性・流動性の向上及び学生の多様性・流動性の向上を進める。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画5-1-3-2 【47】先端的教育研究クラスターの構築 本学を中核とする「知の国際共同体」を形成する先端的教育研究クラスターを構築するため、スピントロニクス分野、データ科学分野をはじめとする9つの国際共同大学院の設置及び「知のフォーラム」事業の実施を両輪とする取組を推進する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】
中期計画5-1-3-3（★） 【48】外国人教員等の増員 第3期中期目標期間中に外国人教員等を1,000人以上に拡大するため、柔軟な人事・給与システムの運用や受入れ環境の整備を進め、外国人教員等の組織的・戦略的雇用を促進する。	【3】	優れた実績を上げている		【3】

※ 中期計画に表示されている記号が示す内容は、それぞれ以下のとおり。
（★）:「個性の伸長に向けた取組」に特に関連する中期計画（「法人の特徴」参照）
（◆）:文部科学省国立大学法人評価委員会に承認された「戦略的かつ意欲的な目標・計画」
（＊）:新型コロナウイルス感染症による影響を特に考慮して分析・判定した中期計画

※ 「下位の中期目標・中期計画における各判定の平均値」のうち、大項目「教育」「研究」の数値については、中項目の判定に使用した数値をそのまま大項目ごとに平均して算出し、その上で4年目終了時に実施した学部・研究科等の現況分析結果による加算・減算を行っている。

【教育】 達成状況評価　　現況分析:「教育」

$$\left(\begin{array}{l}\text{当該法人における}\\ \text{大項目「教育に関する目標」}\\ \text{の中項目の平均値}\end{array}\right) + \left\{\left(\begin{array}{l}\text{当該法人における}\\ \text{（Ⅰ 教育活動の状況）、}\\ \text{（Ⅱ 教育成果の状況）}\\ \text{の全判定結果の平均値}\end{array}\right) - 2^{\text{注1}}\right\} \times \text{係数 } 0.5^{\text{注2}}$$

【研究】 達成状況評価　　現況分析:「研究」

$$\left(\begin{array}{l}\text{当該法人における}\\ \text{大項目「研究に関する目標」}\\ \text{の中項目の平均値}\end{array}\right) + \left\{\left(\begin{array}{l}\text{当該法人における}\\ \text{（Ⅰ 研究活動の状況）、}\\ \text{（Ⅱ 研究成果の状況）}\\ \text{の全判定結果の平均値}\end{array}\right) - 2^{\text{注1}}\right\} \times \text{係数 } 0.5^{\text{注2}}$$

注1 現況分析は4段階判定となっており、【2】判定（相応の質にある）が基準となる判定のため、現況分析の教育または研究の全判定結果の平均値が2を上回る場合は加算、下回る場合は減算となる。
注2 現況分析結果の加算・減算に当たっては、達成状況の評価結果であることを考慮し、係数「0.5」を設定する。
なお、加算・減算後の数値は小数点第3位を切り捨て処理しているため、現況分析結果加算点と教育または研究に関する大項目における判定の平均値の合算値が一致しないことがある。